

通称グラチャン（GC）は、'71年、富士グランチャンピオンシリーズとして開始した。'69年の日本グランプリを最後に、ワークスが排ガス問題を契機に撤退。その後、日本のモータースポーツはプライベートに移り、グループ7によるオープン2座のこのGCが'80年代前半まで異常な人気を誇った。

'73年にはエンジンを2.5以下（SOHCは2.5以下、ロータリーも換算可）とし、最多35台が出走。日本最大級のモータースポーツに発展。

マーチ、ローラ、シエロン、GRDというヨーロッパ製シャシーのほか、ベルコやシグマなどの国産シャシーも参戦した。

GCとは……

'73年には最多35台が出走するという超人気のレースに発展した富士グランチャンピオンシリーズ。平均4万人の観衆を集めた

Cマシンに対し、重心の高いハコZ。どうみても不利に思えたが、予選を終了。

このコースのトップタイムは9秒中盤で走るといだが、今回は長谷見が9秒台に突入、予選1位で通過。予選順位でスタートするコースを選べ、このコース

ス順で各ヒートの出走順（計9ヒートのうち6ヒート）も決まるため、長谷見が優位に立つ。いよいよ決勝がスタートすると、各選手ヒートアップ。練習時コースオフした時は、「すみません〇コースへ」とお願い言葉も、

「〇コース!!」と命令口調に。あまりに速いクルマには「再車検だ」と冗談を飛ばすほど。

レースは予想どおり、長谷見が合計ラップ88周で1位。2位には同ラップながら予選タイムで2位だった原、3位には津々見が入賞。昨年優勝の寺田は5位に終わった。24分の1となつて復活したGC。一般公開の予定はないが、ファンにとって懐かしいものだ。（敬称略）

これは珍なり

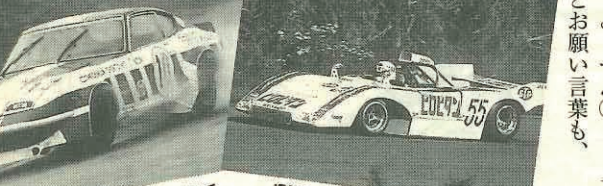
'73年オンワードの sponsor を受けたのは鮎子田寛のシエロンB21P。縦方向のリアのウイングが特徴的

'73年シリーズ3位に輝いた風戸裕のシエロンB23。この年のカラーリングはグリーンにイエロー。翌'74年とは異なっていた

優勝は全6ヒート中5戦を1位で制した長谷見が優勝。2位に原、3位、津久見という結果



柳田春人+フェアレディ240Z ('72年) 津久見友彦+ピロピタンローラT290 ('73年)

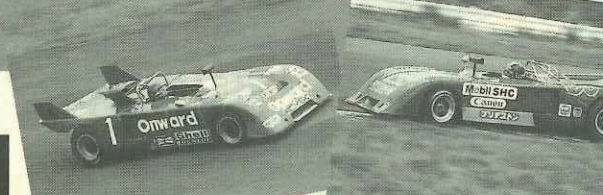


GC 2年目の頃は、240Zも出場。'72年6月4日、雨中のレースを柳田が240Zで65周を走り切り、GCマシンを抑え優勝

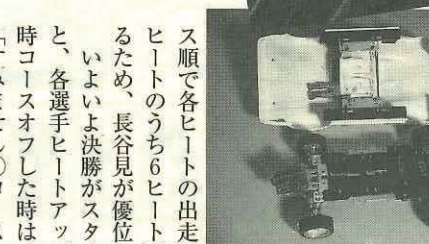
'73年の出場マシンはローラT292と212。写真は10月10日、富士マスタース250kmのT212/BDAで4位に入賞したのも



福士克二（鮎子田車）+シエロンB21P ('73年) 原富治雄（風戸車）+シエロンB23 ('73年)



元トヨタワークスとして活躍中。'80年代からモータースポーツを中心に活動。'80年代からはF1を中心に世界をかける



スロットカーのスケールは24分の1。プラプレートから作るフルスクラッチ（手作り）もあり、当時のマシンを忠実に再現。しかもそれで激しいバトルを繰り広げるのだから1レースでポロポロになるボディも。製作はM.C.F.のメンバー。プラフィット-3という共通のシャシー（5750円）に積み、全長約50m弱のコースで競う。M.F.C連絡先 <http://www.diana.dti.ne.jp/slotcar>

PHOTO/M.F.C.マイケル

懐かしのGCが24分の1になつて激バトル!

まだまだあるクルマ社会のミステリー

これは珍なり

長谷見がいる、鮎子田もいる。そして寺田も高橋晴、津々見柳田もいる。日本のモーターポーツ史上を彩った名選手が一同に介したのは東京、世田谷にあるレーシングコース。もちろんコースといっても50〜60歳代には懐かしいスロットカーのものだ。

今年の第1回に続き、今回は2回目。'70〜'80年代前半全盛を誇った富士グランチャンピオンシリーズ（GC）の出走マシンのスロットカーを、当時のドライバーがそのまま走らせるというファンもビックリのレースが開催された。

当時のレーシングドライバーのほか、F1フォトグラファーの原富治雄氏、F1ISCOで長

年GC事務局を担当した福士克二氏2名が加わり、3分×9ヒート（うち同ドライバーが1コースから6コースまで6回平等になるよう出走）で競われる、というもの。

マシンのスケールは24分の1で、ボディは今回のレースを企画、主催したM.F.C.（モデルカーレーシング・ファンクラブ）のメンバーが製作し、同じシャシーに装着。イコールコンディションになるように作られ、タイムもほぼ同一になるようセッティングされている。

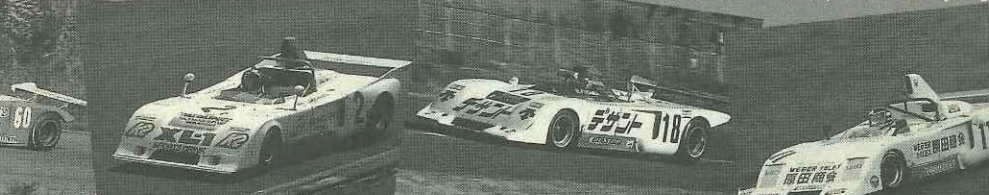
長谷見昌弘、鮎子田寛、寺田陽次郎、高橋晴邦、津々見友彦、柳田春人ら各選手たちがウォームアップ（といつか練習）を始める。タイトターンでコースアウト車続出だが、集まっているスタッフやプレスがコースに戻し、徐々にペースアップ。今回は初参加となる柳田は、ほかの2座のG



元トヨタワークスとして'70年代前半大活躍。1600GTでGT-Rに對抗。現在、KARO社長

元マツダワークスドライバーで、いうまでもなく、ミスター・ルマンの別名があるように、長年ルマン参戦。日MAN代表

元トヨタワークスドライバーであり、日本人として初めてチャンピオンシップのかかったF1に挑戦。現・童夢取締役



高橋晴邦+シグマGC73 ('73年) 寺田陽次郎+K2シエロンB36 ('78年) 鮎子田寛+シエロンB36 ('78年) 長谷見昌弘+シエロンB23 ('77年)

国産マシン、シグマGC73は海外シャシーに挑むカタチでGCに参戦。このシグマの発展型、シグマM74でルマンに参戦

この写真は'80年出走時のシエロンB36。'79年からモノポストが主流となるが、寺田はB36のまま参戦。'78年はシリーズ4位

実車の写真はシエロンB23でスロットカーよりも前のシャシー。カラーリングも異なる。デザインは変わらず

'77年の長谷見のマシンはシエロンB23。ベージュにカラーリングされたマシンで、この年、第1、第3戦で4位入賞